

竜の王子とかりそめの花嫁

沈黙の森の魔女

謎めいた女性。
少年時代のジェスライールに
呪いをかけた後、行方不明に
なっていたが――？

ジークフリード

グリーグバルト国の王。
昔「沈黙の森の魔女」と
恋人関係にあったが、
ナディアと出会ったことで
破局した。

ナディア

グリーグバルト国の王妃。
ジークフリードの「番」で、
彼に溺愛されている。

シェルダン

ジークフリードの弟。
王宮の窮屈な生活を嫌い、
長いこと各国を放浪していた。

コール伯爵

グリーグバルト国の宰相。
フィリーネを説得し、王太子妃に
なることを承諾させた。

ジェスライール

グリーグバルト国の王太子。
竜族の血を引いている。
魔女の呪い^のが原因で、
運命の伴侶である「番」を
見つけられていない。

フィリーネ

没落した侯爵家の令嬢。
これまで社交界には縁がなかったが、
ひょんなことから仮の王太子妃として
王宮に上がることに。

目次

プロローグ	竜の王子と森の魔女	7
第一章	辺境の侯爵令嬢と呪われた王子	9
第二章	竜の一族	42
第三章	竜の番 <small>つがい</small>	119
第四章	止められない想い	166
第五章	竜王の森	210
エピローグ	花嫁は竜の夢を見る	286

プロローグ 竜の王子と森の魔女

「運命だなんて、私は認めない！」

その悲痛な声と共に少年の頭を、まるで鈍器で殴られたかのような衝撃が襲った。圧倒的な「力」に抵抗できず、少年はガクツと膝を落とす。

「殿下！」

ここまで同行を許された唯一の護衛が慌てて駆け寄ってくる。激しい頭の痛みにも、殿下と呼ばれた少年は立ち上がることにすらできなかった。

「二度と番とは会わせないわ！」

目の前の女性が涙を流しながら叫ぶ。最初に見た時は思わず見とれてしまうほど美しい女性だったが、今その顔は悲しみと憎しみに歪んでいる。

「おのれ、魔女め……！」

護衛が憤怒の表情を浮かべて剣の柄に手をかけた。主の異変もたった今起きた不可思議な出来事も、全てこの「魔女」が原因だと分かったからだ。

——違う、彼女は魔女じゃない。

痛みと抗しきれない力の奔流に意識が朦朧とする中、少年は護衛を制止しようとした。ところがそのとたん、頭の中を掻き回されるような強烈な不快感がして、声も出せなくなる。

「殿下に何をした!? そしてあの子どもをどこへやった!?!」

その護衛の言葉に、少年は引っかけかりを覚えた。

——子どもとはなんだ?

だが、考えようとしても思考は形をなさずに崩れていく。襲ってくる「力」のせいだと思うものの、少年にはどうすることもできなかった。

「殿下に仇なす者は、魔女だろうが巫女だろうが許すわけにはいかない!」

「……だめ、だ……」

かろうじて紡いだ言葉も護衛の耳には届かない。止めなければならないのに、意識は急速に遠のいていく。

——だめだ。魔女ではなくて、彼女は……

剣を手に、女性に向かっていく護衛。その足音を聞きながら少年は気を失った。

他の護衛たちが、異変を感じて駆けつけた時——そこには気を失った少年と、無残に切り裂かれて血の海に沈んだ護衛の遺体。そして他にもう一つ、魔女のものと思われる血溜まりだけが残されていた。

——それ以後、「沈黙の森の魔女」の姿を見た者はいない。

第一章 辺境の侯爵令嬢と呪われた王子

竜王の末裔が治めるグリーグバルトは、三方を海に囲まれた海洋王国だ。隣国と陸続きである北部は、深い森にぐるりと囲まれている。人々から「沈黙の森」と呼ばれるその森には、怖い魔女がいると言われていた。一度入ったら出てこれないと恐れられ、地元の人間もほとんど近づかないところが、そんな森に平然と足を踏み入れる娘がいた。他の人々にとっては魔女がいる恐ろしい森でも、その娘——フィリーネにとっては恵みの森なのだ。

今日もまた彼女はそこに分け入り、森の恵みをせっせと収穫していた。赤い林檎をたくさんつけた木に手を伸ばし、果実を傷つけないよう優しくもぎ取っていく。背中の真ん中まで伸びた濃い褐色の髪が、フィリーネが動いたたびに揺れていた。

手の届く範囲にある林檎のうち、最後の一つをもぎ取ると、彼女は足元を見下ろした。

「これくらいでいいかしら?」

林檎が山盛りになった籠を見て、フィリーネは満足そうに笑う。

これだけあれば、しばらくお金に困ることはない。

最後の林檎を籠に入れると、フィリーネは木に向かって手を合わせた。

「竜王様、森の魔女様、森の恵みをありがとうございます」

感謝の言葉を口にしたらあと、籠を両腕に抱えて出口の方角へと進む。

この「沈黙の森」には誰も近寄らないため、道らしい道はない。あるとしたら獣道くらいだ。けれどフィリーネは慣れたもので、木と木の間をすり抜け、鬱蒼とした森から迷うことなく出た。

そして、待機させておいた荷馬車に林檎の籠を載せる。木との間をもう何往復もしたので、荷台には林檎の入った籠がいくつも置かれていた。全てフィリーネの労働の成果だ。

汗を拭って一息つくど、フィリーネは馬車の御者台に乗り込む。そして馬の手綱を引いてデコボコの道を進んだ。

家に帰ったら、家政婦のヘザーにパイを作ってもらおう。ヘザーが作るアップルパイは絶品だから、街に出て売ればいい値段になる。残りは砂糖漬けやジャムにして売ればいい。

林檎の活用方法をあれこれ考えながら、フィリーネは馬車を走らせる。途中、彼女の姿に気づいた領民が、農作業の手を休めて手を振った。それに手を振り返しつつ馬車を進めると、やがて大きな屋敷が見えてきた。小高い丘の上にとんと立つその屋敷が、フィリーネの家であるキルシュ侯爵邸だ。

遠くから見れば、侯爵家の名に相応しく大きく立派に見えるだろう。だが近づくにつれて、その印象は変わっていく。かつてレンガ色だった壁はくすみ、蔦が這い回っている。いくつかの部屋の窓ガラスは割れており、雨風が中に入らないよう内側から木を打ちつけてあった。

廃墟とまではいかないまでも、それに近い状態だ。

所々崩れた塀をぐるりと回り込みながら、フィリーネは屋敷を見上げてため息をつく。収穫した

林檎をいくら売ったとしても、修理費用を賄うことは不可能だろう。

「……空からお金が降ってこないかしら……？」

思わずそんな言葉が口から漏れる。十九歳の若い女性には似合わない言葉だが、すでに口癖になってしまっていた。

こんなフィリーネだが、一応侯爵令嬢という肩書きを持っている。荷馬車を使って一人で森に出かけようが、質素な服を身に纏っていようが、舞踏会や夜会などの煌びやかな場に一度も行ったことがなかるうが、れっきとした貴族の一員だ。

キルシュ侯爵家といえば、由緒正しい家柄として知られている。大昔には宰相や大臣といった人材を輩出し、時の国王の妹姫が降嫁したこともあった。それが今や広大だった領地のほとんどを売り払い、庶民同様の暮らしを余儀なくされている。それもこれも全ては曾祖父の放蕩のせいだった。

フィリーネの曾祖父——先々代のキルシュ侯爵は女遊びや賭け事に明け暮れ、あつという間に身代を潰してしまった。その上、莫大な借金まで残して亡くなったのだ。跡を継いだ祖父は仕方なく領地を切り売りして凌いだ。領地が減ればそれだけ収入も少なくなる。借金を返すために領地を売るといふ悪循環を繰り返した結果、フィリーネの父がまた小さいうちに立ち行かなくなってしまうという。

零落して王都の屋敷を畳み、狭い領地に引っ込むしかなくなったキルシュ侯爵家は、次第に貴族社会から忘れられていった。

フィリーネも正直なところ、貴族令嬢としての自覚はなかった。なぜなら大きな屋敷に住み、領

民からお嬢様と呼ばれていようが、暮らし向きは彼らとほとんど変わらないのだ。使用人も少なく、父が幼い頃からキルシュ家に仕えてくれている、ベンとヘザーという名の老夫婦だけであった。

給料もろくに払えないのに、見捨てずにいてくれる二人には感謝している。せめて彼らが引退する時に生活の心配がいらなくらいの退職金を渡してあげたい、というのが当面のフィリーネの目標だ。

「……うーん。何かお金がばーつと稼げる方法はないかしら？」

そう呟いた時、正門の方からベンが走ってくるのが見えた。

「お嬢様あー！」

「あら、ベン。どうしたの？」

いつもはおっとりしているベンの慌てように、フィリーネは眉をひそめる。馬車を止めて待つてると、近くに来たベンが興奮した様子で言った。

「コール様がいらしてますよ、お嬢様！　すぐに応接室の方へいらしてください！」

「メルヴィンおじ様が……？」

メルヴィン・コール伯爵はフィリーネの父の幼馴染だ。キルシュ侯爵家が零落して田舎の領地に引つ込んだあとも交流が続いている、数少ない貴族のうちの一人でもある。

「まあ、メルヴィンおじ様がここに来るなんて何年ぶりかしら」

何しろ彼は、このグリーグバルトの宰相を務めているのだ。以前はお土産を手に時々訪ねてきてくれたが、宰相になってからは忙しいようで、久しく訪れていない。

「前にいらしてからもう五年になりますよ、お嬢様」

ベンはさらりと答える。年をとっても記憶力のよさは健在だ。

「もうそんなになるのね」

フィリーネが頷きながらしみじみと呟くと、ベンは何かを思い出したようにハツとしたあと、馬車の方へ身を乗り出した。

「そんなことより、コール様がお嬢様にいい話があると！」

「いい話？」

なんのことだか分からずキョトンとしたフィリーネだが、その意味を悟って目を丸くする。

妙齢の自分に持つてこられた「いい話」とくれば、縁談しかないだろう。

どうりでベンがこんなに興奮しているわけだ。彼は常日頃からフィリーネの結婚について心配していたのだから。

「コール様のご紹介なら、きつととてもいいお相手に違いありません。もう、お嬢様がお金の心配をする必要もなくなるでしょう。もともとお嬢様は器量よしなのです。キルシュ侯爵家が貧窮しているとはいえ、社交界に出れば引く手あまただったはずですよ」

「……家が貧窮しているというのは由々しき問題よ、ベン」

十九歳といえは、この国では結婚適齢期真っ只中だ。それに貴族の令嬢なのだから、縁談の一つや二つあってもおかしくない。けれど、家が持参金も用意できないほど貧乏で、社交界デビューすら果たしていないフィリーネに縁談は皆無だった。

フリーネ自身も結婚は諦めている。それに、家の経済状況のことばかり心配していて、自分の将来のことなど考えられないのが実情だ。だからこそベンも心配しているのだが……

「とにかく話を聞いてみるわ。応接室ね」

フリーネは馬車を降りながら尋ねた。馬の手綱をフリーネから受け取りつつ、ベンは頷く。「はい。旦那様と奥様も、応接室でお嬢様の帰りを待っております」

「じゃあベン、この林檎を貯蔵庫に運んでおいて。話を聞いたらすぐ手伝いに行くから」

その言葉を聞いたベンは、皺だらけの顔に笑みを浮かべた。

「これしきのこと、私一人でも平気ですよ。それより皆さんお待ちですから、お急ぎください」
「分かったわ」

フリーネはスカートひざかけを翻し、貴族女性とはとても思えない軽い足どりで応接室へ向かった。

「おお、フリーネか。すっかり綺麗なお嬢さんになったね」

応接室に入ったフリーネを迎えてくれたのは、ふつくらした顔に人のよさそうな笑みを浮かべるメルヴィン・コール宰相だった。

「いらつしやいませ、メルヴィンおじ様」

つられて笑みを返しながらフリーネは挨拶をする。

「小さかったフリーネがこんなに大きくなるなんて、私たちも年を取るはずだな、アイザック」
コール宰相はフリーネの父親であるアイザック・キルシュ侯爵に視線を向けた。キルシュ侯爵

は、微笑しながら頷く。

「そうだな」

「あら、おじ様は最後に会った時から、ちつとも変わってらつしやらないわ」

母親の隣に腰を下ろしつつ、フリーネはコール宰相に告げた。

痩せ型の父の倍はあると思われる、恰幅かっぴのよい身体。丸っこい目をした姿は、なんとなく狸たぬきを思わせる。そんな彼を一目見ただけで、「グリーングバルトにこの人あり」と言われるほど有能な宰相だと思ふ人はいないだろう。

「で、メルヴィン。忙しい君がわざわざこんな辺鄙へんぴな場所までやってくるほどいい話とは、一体なんなんだい？」

キルシュ侯爵が身を乗り出して尋ねる。フリーネはおや？と眉を上げた。メルヴィンが持ってきた「いい話」がなんであるかは、両親もまだ知らないらしい。

フリーネの考えられていることが分かったのか、母親のキルシュ侯爵夫人が困ったような笑みを浮かべて囁く。

「メルヴィン様が、あなたに直接話したいと仰おしやってね」

「私に直接……？」

それはおかしい。貴族令嬢の縁談となれば、まず親に話を通すのが一般的だ。いくら没落しているのが、平民同然の生活を送っているのが、キルシュ家は一応貴族社会に名を連ねている。

——なのに、私に直接話したいなんて……

これはどう考えても縁談ではなさそうだ。もしかしたら、フィリーネにいい働き口でも見つけてきてくれたのかもしれない。

……結果として、このフィリーネの考えは間違っていたが、ある意味正解だったとも言える。コール宰相はフィリーネをじっと見つめ、背筋を伸ばしてこう切り出した。

「そのことなんだが、フィリーネ。王太子妃になつてはくれまいか？」

「——は？」

フィリーネの口がポカンと開いた。

竜王の国、神に愛された国とも呼ばれるグリーグバルト。大陸有数の大国であるこの地を治めているのは、竜王の末裔まつぎと言われる王族だ。

現国王夫妻の間には一人の男子がいる。今年二十四歳になる王太子のジェスライルだ。

彼が若い頃の国王によく似た美男子で、女性たちの憧れの的だということは、辺境の地に住むフィリーネですら知っている。彼が誰を伴侶はんりなに選ぶのか、国中の人々が固唾かたずを呑んで見守っていることも。

「フィリーネがジェスライル王子の妃に？」

キルシュ侯爵夫妻もフィリーネの隣であんぐりと口を開けている。三人の驚きを他所よそに、コール宰相はにこにここと笑いながら何度も頷いた。

「ああ、実に名誉なことだろう。なあに、曲がりなりにも侯爵令嬢だ。王族に嫁かしてもなんの問題

もない」

「……ちよつと待つてください、メルヴィンおじ様！」

ようやく声を出せるようになったフィリーネは、慌てて口を挟んだ。

確かに侯爵家といえば、公爵家に次いで高い地位になる。ここが普通の国なら、侯爵令嬢が王太子妃に選ばれたとしてもなんの問題もないだろう。

けれど、ここグリーグバルトに限っては違うのだ。

「ジェスライル殿下の番ばんは？ 番はどうしたんです？ 王族の妃には、番がなるのが習わしでしょう？」

そう、グリーグバルトの王族は人であつて人ではない。かつてこの世界の生物の頂点に立っていた竜族。その血を継ぐ、半竜半人なのだ。今やその血は薄れ、竜の姿を取ることはできないものの、常人が持ち得ない強大な「力」を持っているという。

それだけでなく、王族は竜族特有の性質も継いでいた。その最たる例が、番と呼ばれるたった一人の異性を伴侶に選ぶことだった。

番に選ばれる相手は貴族も平民も関係ない。現に今の国王の番である王妃は、外交官の娘で下位の貴族出身だ。

王族はひとたび番を選べばその相手だけを愛し、他の異性には見向きもしないらしい。そのため、番は自動的に結婚相手として迎えられるのが習わしだった。

キルシュ侯爵夫人が、ぱあつと顔を輝かせる。

「もしや、フィリーネが王太子殿下の番なの？」

王族の番に選ばれ、一途に愛されることは、グリーグバルトの女性なら誰もが夢見るシチュエーションだ。自分の娘が王太子の番に選ばれたのだと考え、夫人が興奮するのも無理はない。

けれど、コール宰相は首を横に振った。

「いや、違う。番に選ばれたわけじゃないんだ」

でしようね、とフィリーネは内心呟く。社交界デビューどころか、一度も王都に行ったことがないフィリーネは、当然王太子とも面識がない。そんな彼女が番に選ばれるわけがないのだ。

「では、なぜフィリーネを王太子妃に？」

キルシュ侯爵が不思議そうに首を傾げる。コール宰相は扉の方をちらりと見て、人の気配がないのを確認すると、声を潜めて告げた。

「これは本来なら国家秘密なんだ。だからこれから私が話すことは、他の誰にも言わないでほしい。もちろんベンたちにもな」

「……何か重大な事情があるんだな。分かった。誰にも言わないと誓おう」

神妙な顔でキルシュ侯爵が頷き、夫人もそれに倣う。最後にフィリーネが頷くのを見て取ると、コール宰相は重々しく口を開いた。

「実は王太子……ジェスライル殿下には呪いがかけられていて、番を選ぶことができんのだ」

「……番を選ぶことができなくなる呪い？」

フィリーネは目を大きく見開いた。

「正確に言えば、番が誰だか分からなくなる呪いだ。そのため、殿下は番を選ぶことができない」
「では、殿下が二十四歳になっても未だ番を選ばないのは、その人とまだ出会っていないからではなくて……」

「会っても分からないので、選びようがないだけだ」

「……なんということだ。確かにそれは一大事だな」

キルシュ侯爵が眉を寄せて呟く。直後、彼はふと何かに気づいたように顔を上げた。

「王族に呪いをかけることができるとは、相手は一体何者だ？ まさかグローヴ国の者かい？」

グローヴ国というのはグリーグバルトの隣国だ。半島であるこの国と「沈黙の森」を挟んで唯一国境を接している。だが、グリーグバルトの豊かな領土を狙い、幾度も侵攻されかけた歴史があり、お世辞にも良好な関係とは言えない。

「いや、確かにグローヴ国は色々ときな臭いが、殿下の呪いに関しては違う。ジェスライル殿下に呪いをかけたのは、『沈黙の森の魔女』だ」

「魔女が？」

予想もしなかった言葉に、フィリーネたちは戸惑う。

「沈黙の森」には魔女がいて、森に入った人間を惑わすというのは、お伽噺のように広く伝わっている。だが、魔女に呪われたなどという話は聞いたことがなかった。そもそも魔女の姿を直接見た者はおらず、存在を信じない人も多い。

「本当に『沈黙の森の魔女』なのかい？」

「ああ。殿下は十二歳の時に沈黙の森で魔女と顔を合わせ、その時に呪いをかけられた。その呪いは強力で、十二年経った今も解けないままで」

コール宰相は深いため息をつく。

「けれど、殿下には『番』が必要だ。いや、このグリーグバルト国にとって必要なのだ。そこで、フリーネに白羽の矢が立った。表向きは番に選ばれたということにして、さっそく宮殿に……」

「待って！ 待ってください、メルヴィンおじ様！」

フリーネは慌ててコール宰相の言葉を遮った。

「つまり、おじ様は私に全国民を騙して、偽物の番になれと言ってるのね？」

「かいつまんで言うと、そういうことだ」

大きく頷くコール宰相に、フリーネは胡乱な目を向ける。

王太子が番を見いだせないというのは確かに大問題だ。けれど、だからといって偽物の番を王太子妃に据えるとは、いささか乱暴すぎやしないだろうか？

しかも、偽物の番に選ばれたのが自分となれば、笑うに笑えない。

「国民に正直に説明した方がいいんじゃないの？ ジェスライル殿下の事情を」

そう言いながらもフリーネには分かっていた。国民に向かって王太子が呪われていると発表するのは難しいだろうと。

国王の子どもはジェスライル王子ただ一人で、代わりはいない。将来の国王が呪われているなど知られたら混乱は必至だ。

当然、コール宰相は首を横に振った。

「そんなことはできない。殿下の事情を国民に知らせたら、国が傾きかねんからな」

「まさか。そんな大げさな……」

思わず口にしたフリーネを、コール宰相はじろりと睨んだ。

「この国にとって王族の番がどれだけ重要かを、フリーネは理解できていないようだな。いいかい、フリーネ。この国が豊かなのも、竜の血を継ぐ王族がいるからなのだ。それくらいは習っているだろう？」

「そりゃあ、知っているけれど……」

かつて、ここは何も生み出さない不毛な大地だったという。だが竜王が人間の娘を番に選び、この地に国を興した。自然を操る竜王の力によって大地は潤い、豊かな国土となったらしい。

竜王が亡くなり数千年の時を経た今も、この国は災害に見舞われることなく、恵み豊かな地であり続けている。それは、竜王の力を継ぐ王族がいるからこそ……というのは小さな子どもでも知っている。

けれど正直に言って、フリーネは真実だと思っていない。王族の求心力を失わないための方便だと考えていたのだ。……王族至上主義なコール宰相の前ではとても口にできないが。

「そして王族が竜の力を維持できているのは、次代を生み出す『番』のおかげだ。ジェスライル殿下の問題は、わが国の存続に関わる。特にグローヴ国の動きが活発になってきている今はな」

そのコール宰相の言葉に、キルシュ侯爵がハッと顔を上げた。

「グロヴ国が戦争の準備をしているという噂は本当なのか？」

「え？」

初耳だったフリーネは驚いて父親の顔を見る。その視線を受けて、キルシュ侯爵が困ったように微笑んだ。

「流れの商人がそんなことを言っていたと、村人が報告してくれたんだよ。まさかと思つて、本気にしてはいなかったんだが……」

「グロヴ国の噂はもう、ここにまで届いているのか」

「コール宰相は顔をしかめたあと、重々しく頷いた。

「噂は本当だ。やつらはまたこの国に侵攻しよう、戦争の準備を始めておる」

「なんてことだ。こしほらくの間は平和だったのに……」

グロヴ国が前回戦争を仕掛けてきたのは、もう二十六年も前のことだ。その時は陸と海から同時に攻めてきたのだが、陸からの軍勢は「沈黙の森」を越えることができず、また海からの軍勢もグリーグバルトには到達できなかった。当時はまだ王太子だったジークフリード国王が自ら海軍を率い、グロヴ国の船団を殲滅させたのだ。

「なあに、今度も殿下たちのお力があれば、グロヴ国など恐るるに足りん」

胸を張つて言うコール宰相だったが、不意に肩を落とした。

「……と言いたいところだが、今回は不安要素がある。ジェスライル殿下が呪いのせいで番を見いだせないことを、なぜかグロヴ国は知っておるのだ」

「なんですつて？」

フリーネたちは息を呑んだ。

「殿下の呪いのことはごくわずかな人間にしか知らされておらず、極秘とされている。現にグリーグバルトの国民に漏れた形跡はない。けれど、つい最近グロヴ国に放っていた密偵から、驚くべき報告があったのだ。なぜかグロヴ国の王や重鎮が殿下の呪いのことを知っていて、これを侵攻の好機と見ているとな」

「誰かが秘密を暴露した……つてこと？」

フリーネが恐る恐る尋ねると、コール宰相は首を横に振った。

「分からない。グロヴ国も我が国に密偵を放っているだろうから、そういった者たちが探り当たったのかもしれない。なにせよ、戦争が始まればやつらはその事実を流布し、国民を動揺させようとするだろう」

「でも……たとえ国民を動揺させたつて、簡単に侵攻できるとは思えないわ。だってグロヴ国との間には森があるもの。あそこは越えられないでしょう？」

この国は大陸から南に突き出た半島である。そして国の北側には、「沈黙の森」がまるで蓋をすめるかのように横たわっていた。陸から攻めるなら森を通らなければならぬが、今まで他国の軍隊が森を越えられたことはない。森はずっとこの国を敵の侵攻から守ってきたのだ。

国民が森を恐れる一方で敬つてもいるのはそのためだ。けれど、人々の森に対する畏怖の感情が、ジェスライル王子にとって不利になるかもしれないとコール宰相は言う。

「その『沈黙の森』の魔女に殿下は呪われているのだ。グロウヴ国の軍隊が魔女を味方につけ、今度こそ森を越えて侵攻してくるかもしれない——国民がそんな不安を抱けば、足並みは崩れるだろう」

少なくとも、王族の求心力が低下するのは必至だ。

「だからこそ、殿下の番が今すぐ必要なのだ。殿下が番を見つけて娶り、この国にはなんの不安要素もないことを内外に示さねばならない」

なるほど、とフリーネは納得する。どうりでコール宰相が慌てて偽物の番を王太子妃にしようとしているわけだ。殿下が番を見つけたと示せばグロウヴ国の動きを封じられるだけでなく、国民の不安を払拭することもできる。

番に目に見える印はなく、誰が番なのかを知ることができるのはジェスライル王子だけだ。裏を返せば、彼が番だと認めれば、誰も異を唱えることはできない。

「分かったわ。ジェスライル殿下に『かりそめの番』が必要なことは」

フリーネはうんうんと頷いたあと、コール宰相の顔を探るように見つめた。

「分からないのは、なぜ私が選ばれたのかということよ。おじ様もご存知の通り、うちは没落寸前で貴族と言っても名ばかりだわ。もつと適任の令嬢が他にいくらでもいるでしょうに」

フリーネが目の覚めるような美人ならともかく、あいにく少々見られる程度の容姿でしかない。並みいる令嬢たちを押しつけて自分が選ばれる理由が思いつかなかった。

「確かに貴族令嬢は他にもたくさんいる。だがな、めぼしい令嬢は殿下とすでに顔を合わせている

んだ。今さら殿下の番とするには少々不都合で……」

コール宰相が深いため息をつく。

竜族は相手を一目見れば番かどうか分かるのだという。初めて会った時点で何も言わなかったのに、今になって番だと言い出すのは確かにおかしい。

ジェスライル王子が二十歳を過ぎても番を見いだせないことで、呪いのことを知らない重臣たちは焦り、事あるごとに大勢の令嬢を城に招いていたらしい。そのことが裏目に出ているのだという。

「彼らは舞踏会や茶会、若い令嬢たちの社交界デビューの場にまで殿下を引っ張り出して、顔を合わせる機会を設けていた。呪いのことは極秘だから反対するわけにもいかなくてなあ。おかげで殿下に目通りしていない娘を見つけるのが大変で……」

コール宰相はしみじみと呟いた。ジェスライル王子と顔を合わせていない令嬢をなんとか探し出そうと、苦勞してきたことが分かる。

ところが突然、グッと拳を握ると、コール宰相はフリーネを意味ありげに見つめた。フリーネはうっと身を引く。

「だが、私は思い出したんだ。まだ殿下に顔を合わせていない高位の貴族令嬢がいることを！ フリーネ、君のことだよ！」

「こんな時だけ思い出さなくていいです！」

「国の存亡がかかっておるのだ！ ほれ、この通り！ 殿下の番として王太子妃になってくれ！」

ソファから滑り落ちるようになって跪くと、コール宰相はいきなり土下座をした。これにはフリーネはおろか両親までもが仰天する。

「やめてよ、おじ様！」

「お、おい、メルヴィン」

「メルヴィン様……」

「頼む、フリーネ。私やこの国を助けると思っ、引き受けてくれ！」
地面に頭を擦りつけてコール宰相は訴える。

「ちよ、ちよっと、ちよっと！」

これはあまりに卑怯な頼み方ではないかとフリーネは思った。

「頭を上げてよ、おじ様！ 情に訴えるやり方は酷いと思うんですけど！ だいたい、殿下と会ったことがない人は私の他にもたくさんいるはずですよ」

王族の番は身分を問われない。つまり貴族でなくたって構わないのだ。平民の中になら、ジェスライル王子と顔を合わせたことがない娘は山ほどいるだろう。

「王都に美人で働き者だと評判の娘はいないんですか？ そういう娘を殿下が見初めたことにすれば、こんな田舎の没落貴族を番にするよりよっぽど説得力が……」

「もちろん本物の番なら平民でも構わないが、かりそめの番となるとそうはいかんだ。万が一偽物だと知られようものなら、その娘の命が危うい」

もし本物の番でないとバレても、侯爵令嬢という身分がフリーネを守ってくれる。貴族に危害

を加えれば重い罪に問われるからだ。コール宰相はそう言いたいらしい。

「それにキルシュ侯爵家には、かつて王族が降嫁なさっている。フリーネが王族の血を継いでいることも重要なんだ」

そこでキルシュ侯爵が異議を唱える。

「でもね、メルヴィン。時の王女殿下が我が家に嫁いできたのは、もう四百年も五百年も前のことだよ？ 王族の血なんかとつくに薄れて……」

「それがそうでもないんだ」

コール宰相が、がばっと上半身を起こした。

「知つての通り、竜王陛下は金色の鱗を持っていて、人の姿の時も髪と瞳は金色だったそう。その名残で、王族はほぼ例外なく金色の髪か瞳を持って生まれる。そしてフリーネの琥珀色の瞳、これも王族の血を引く者には稀に表れる特徴らしい。いわゆる先祖返りだな。さらにフリーネには『力』があるとジェスライル殿下は仰っている。そのこともあって、フリーネが王太子妃に適役だと——」

「待って、おじ様。誰が仰っているんですって？」

この琥珀色の目が先祖返りだの、自分には力があるのだと、色々気になることを言われた。だが、一番気になったのはそのことだった。

「ジェスライル殿下だよ、もちろん」

「は？ なんで殿下がそんなことを知っているの？ 会ったこともないのに」

「ああ、候補に挙がった女性たちを、ジェスライル殿下はわざわざ確認しに行かれたそう。そしてフィリーネを見た時、微かな魔力があるのを感じたらしく、それが決め手となった。フィリーネを王太子妃に迎えたいと、ジェスライル殿下が自ら選んでくださったのだぞ？ 名譽なことじゃないか」

「殿下は、いつ私を確認したというの？」

知らぬ間にこそそ見られて値踏みされていたのだから、フィリーネとしてはいい気分はしない。

コール宰相は床に座り込んだまま首を傾げる。

「さあ？ 殿下は不思議な力をお持ちだからだな。気になるなら直接殿下に尋ねればいい。フィリーネならお答えくださるだろう」

「……王太子妃になることを承知してはいないんですけど」

「フィリーネにとっても悪くない話だぞ？ このまま田舎に引っ込んでいても、嫁のもらい手はない」

「それは……」

痛いところを突かれてフィリーネはぐっと詰まった。それを見たコール宰相の顔に狡猾ことうめそうな笑みが浮かぶ。

「もし王太子妃になることを承知してくれるのなら、悪いようにはしない。何よりキルシュ侯爵家は王太子妃の実家になるのだから、国から充分な資金援助を受けられるぞ」

「資金援助……？」

「うむ。毎月五百万ルビーでどうだ？」

キラリと目を光らせながら、コール宰相は具体的な数字を挙げた。

「毎月五百万ルビー！」

フィリーネは思わず声をあげた。ルビーというのは、この国で一番高額な通貨だ。五百万ルビーともなれば、キルシュ侯爵家の年収に相当する。

毎月五百万ルビーが入るのならば、家の修繕もできるし、ベンたちに給料を支払っても余裕で余る。失って久しい土地も買い戻せるかもしれない。

フィリーネはごくりと喉を鳴らした。

——私が王太子妃になるのを承知すれば、もうお金の心配はなくなる……

フィリーネの心がぐらぐらと揺れていることに気づいたコール宰相は、さらに畳みかける。

「心配いらない。王太子妃と言ってもお飾りの妃でいいんだ。今の王妃陛下は精力的に政務をこなされているが、フィリーネ自身が望まなければそれに倣なまう必要はない。それに——」

コール宰相の口元に笑みが浮かぶ。フィリーネを生まれた時から知っているので、彼女の心を動かす術すべを充分心得ていた。

「国王陛下によれば、殿下の呪いを解く方法がないわけではないそう。殿下の呪いが解けて本物の番が見つかれば、フィリーネが王太子妃でい続ける必要はない」

「……つまり、期間限定の王太子妃だというわけね？」

フィリーネの呟つぶきに、コール宰相はしたり顔で頷いた。

「そうとも。単に宮殿に雇われただけと思ってくればいいんだ」
単に宮殿に雇われただけ。その言葉は妙にフィリーネの心に響いた。

確かに、王太子妃になる代わりに資金援助を受けられるのだから、お金で雇われたとも言える。それにジェスライル王子の呪いが解けて真の番がつか見つかれば、フィリーネの役目は終わるのだ。
「フィリーネ……」

両親が心配そうに見ていることに気づかず、フィリーネは胸算用をする。コール宰相の術中はなにまんと嵌はまっていることも知らずに。

しばし考え込んだあと、フィリーネは顔を上げた。

「分かったわ。王太子妃になります。その代わり資金援助の件、忘れないでね、おじ様」

「じゃあ、十日後に迎えが来るからな」

フィリーネの返事を聞くやいなや、そう言い残してコール宰相は帰っていく。

彼を乗せた馬車と護衛の兵士たちを玄関先で見送りながら、フィリーネはふと思った。

——ジェスライル殿下は、どうして「沈黙の森の魔女」に呪われたのかしら？

コール宰相が言ったのは魔女に呪われたという事実だけ。原因については一切言及しなかった。

——まあ、次に会った時でいいか。

そののんきに考えるフィリーネは、コール宰相がいくつもの重要な事実をわざと隠したことにまだ気づいていなかった。彼がそそくさと帰ったのは、それについて質問されなくなかったからだ。

いうことにも。

馬車の姿が見えなくなると、両親が心配そうに声をかけてきた。

「フィリーネ。私たちのことなら気にしなくていいんだぞ？　いつそ貴族をやめて農夫になっても構わんし」

「そうよ。王太子妃になるのはとても大変なことだわ。私たちのためにあなたが重い責任を背負う必要はないのよ」

今ならまだ間に合うと口をそろえるキルシュ侯爵夫妻に、フィリーネは微笑んだ。

「大丈夫よ。王太子妃になるって言ってもお飾りでいいんだもの。殿下に真の番が現れるまでのことだしね。……それに」

言うべきかどうか迷いながらも、結局フィリーネは口にした。

「おじ様はあんなふうに土下座までしてくれただけど、本来ならこれは断れない話なのではないでしょうか？」

「それ……」

キルシュ侯爵は言いよんだ。

コール宰相は土下座して頼み込み、破格の条件まで示してくれたが、そこまでする必要はなかった。彼はたったひとこと口にするだけでよかったのだ。——これは王命だと。

そう言われてしまえばフィリーネたちに逆らうことはできなかっただろう。コール宰相が王命だと言わなかったのは、キルシュ侯爵家への気遣いに他ならない。

「おじ様がそこまで配慮してくれたんだから、今さら嫌だなんて言えないわ。それに、私はキルシュ家だけじゃなくて、ここが好きなの。土地や領民がね。私が王太子妃になることで、みんなの暮らしが楽になるなら、こんなに嬉しいことはないわ」

侯爵家にお金がないばかりに、領民たちにも不便な生活をさせているという現実を、フィリーネは知っていた。

川が増水して橋が流されても、その建て直しすらままならないのだ。領民たちが木を切り出し、粗末な橋をつくって急場を凌いでいるが、また洪水が起こればすぐに流されてしまう。

お金。お金さえあれば……。フィリーネはずっとそう思っていた。

喉から手がでるほど欲しいお金が、王太子妃になれば手に入る。どうして引き受けずにいられるだろうか。

「王都ではおじ様が色々助けてくれるはずだし、お飾りの王太子妃としてのんびり過ごすつもりよ。生まれてこの方贅沢ぜいたくなんてしたことがないから、楽しみだわ」

フィリーネはいつも以上に明るく笑った。

もちろん、偽りの番を演じなければならぬのだから、そう気楽にはいかなさう。でも、どんなに辛い目に遭ったとしても、キルシュ家と領地のことを思えば耐えられる。

「だから、私のことは心配しないで」

「フィリーネ……」

笑顔と言葉の裏に隠されたフィリーネの不安。それを分かっているのか、両親の表情が暗れるこ

とはなかった。

* * *

『十日後に迎えが来る』

その言葉通りにきつちり十日後、キルシュ侯爵邸の玄関先には王家の紋章が入った四頭引きの馬車と、馬に乗った護衛の兵士たちが並んでいた。

持っている服の中で一番上等なシュミーズドレスを着込み、私室の窓から外を眺めていたフィリーネは、予想以上に大げさな迎えに顔をしかめる。

——てつきり密かなお迎えだと思っていたのに。

これでは王族に縁ゆかりのある重要人物が乗っていると、大声で主張しているようなものだ。

確かに「番」は重要だが、これほど大々的にする必要はあるのだろうか？

そう思っていたフィリーネだが、馬車の中から現れた人物を見てハツとした。

扉から出てきたのは、軍服らしき服を身に纏まとった青年だ。明るい金色の髪が日に照らされてキラキラと輝いている。

——まさか!?

三階の窓からでは顔がよく見えない。けれど、王家の馬車から堂々と出てきた様子といい、伝え聞いていた容姿と一致する点といい、どう考えても「あの方」としか思えなかった。

——どうしよう。お父様からは、呼ばれるまで部屋で待機していると言われたけれど……

フィリーネはそわそわと部屋の中を歩き回る。思いもかけない事態になり、故郷を離れることへの寂寥感は一気に吹き飛んでいた。

しばらくするとヘザーが慌てた様子で部屋に飛び込んできた。

「た、大変です、お嬢様！ 殿下が！ ジェスライル殿下が来ておられます！」

——やっばり……！

王家の紋章が入った馬車で来るのも、大勢の兵士を引き連れているのも当然だ。王太子本人が迎えに来たのだから。

「すぐに行くわ」

「お嬢様が来るのを待ちきれず、自ら迎えに来られたそうですよ。愛されていますね、お嬢様」

ヘザーは嬉しそうに顔をほころばせる。彼らが知っているのは、フィリーネがジェスライル王子の「番」に選ばれたということだけだ。

『なんとという幸運でしょう！ お嬢様がいなくなるのは寂しいですが、このままお嫁にも行かず田舎でひっそり暮らされるのかと心配しておりましたので、喜ばしいことです』

何も知らない二人はフィリーネに降って湧いた幸運（と彼らは思っている）を喜んでくれた。彼らを騙すのは心苦しいが、真実を告げることはできない。

フィリーネはヘザーの皺だらけの手を取って言った。

「下では話す余裕がないかもしれないから、ここで言うておくわ。ヘザー、お父様たちのことをお

願いな

「お嬢様……。はい、旦那様たちのことはご心配なさらず。おかげさまで使用人も増えましたし、家のことは私たちがしっかり守りますから」

ヘザーは目を潤ませてフィリーネの手を握り返す。

コール宰相がやってきた日の三日後、キルシュ侯爵家には支度金としてかなりの大金と、宰相が手配した使用人たちが届けられた。それだけでなく、家の修理工まで大勢派遣されてきたのだ。

彼らの素晴らしい働きにより、荒れ放題だった屋敷は見違えるように綺麗になり、往年の姿を取り戻している。

ありがたいことだが、そんなコール宰相の気配りもフィリーネを逃がさないためだと分かっているだけに、どうにも追い込まれている感じがして仕方なかった。それは両親も同じだろう。

でも言い換えると、王宮はそれだけ「番」を必要としているということでもある。だからフィリーネが「かりそめの番」の役目を果たしてさえいれば、コール宰相は約束を守ってくれるはずだ。

——だから、大丈夫。

そう自分に言い聞かせながら、ヘザーと一緒に玄関ホールに下りる。そしてフィリーネは、ホルの一角を占める華やかな集団に目を奪われた。

華やかというより壮麗と言った方がいいかもしれない。剣を腰に差し、一糸乱れぬ様子で立ち並ぶ上級兵士たち。その中心にいるのは、青の軍服を身に纏ったジェスライル王子だ。

すらりと背が高く、一見細身だが、その立ち姿は周囲の兵士たちに少しも見劣りしていない。そ

れどころか、ただ立っているだけで品格と威厳が伝わってくる。

その姿に圧倒されて、フィリーネは声も出せなかった。階段を下りきったところで足も止まってしまう。本当だったらジェスライール王子に自分から声をかけて、淑女の礼を取らなければならないのに。

立ち尽くしたままのフィリーネに気づき、ジェスライール王子が微笑みを浮かべて歩み寄ってきた。

「フィリーネ」

やや長めの金髪に、明るい水色の瞳。若い頃のジークフリード国王とよく似た端正な顔の持ち主で、元帥として軍の頂点に立っている。だが気質はいたって穏やかで、老若男女から広く支持されている——というのが、フィリーネの知っているジェスライール王子の情報だ。

それに、少年の頃の絵姿を見たこともある。王族に心酔しているコール宰相——当時はまだ宰相ではなかったが——が、王族一家が描かれた絵を贈ってくれたからだ。それは田舎にいて王族の姿を知る機会がないフィリーネのためだった。

けれど、どうやらあの絵はジェスライールの煌びやかさや美しさを描ききれていなかったようだ。すつと通った鼻筋も、長いまつ毛も、色気すら感じられる口元も、あの絵にはないものだった。

——これなら、貴族女性たちが騒ぐのも無理はないわね。

徐々に近づいてくる美貌に目を見張りながら、フィリーネはそんなことを考えていた。

「フィリーネ。僕の『番』」

目の前に立ったジェスライールは、水色の目に甘い光を浮かべてフィリーネの手を取る。

「え？」

「君を迎えられるこの時を待っていたよ」

やや掠れた声で優しく囁かれ、フィリーネは混乱した。

——い、一体何が起きているの？

けれど、彼の口元に浮かんだはずらつぽい笑みに気づいて納得する。

——ああ、そうか。これはお芝居なんだ。

玄関ホールには兵士たちだけでなく、キルシュ侯爵夫妻や使用人たちも集まっていた。この中で真実を知っているのはフィリーネと侯爵夫妻、それにジェスライールを含めてもわずか数人だけだろう。

つまり大部分の人間にとって、フィリーネはジェスライールが待ち望んでいた「番」なのだ。ジェスライールはただ周囲の人々が期待する姿を演じているだけに過ぎない。

それならフィリーネも同じように振る舞うだけだ。なぜならジェスライールと自分はある意味、運命共同体なのだから。

「お迎えありがとうございます、殿下。私が『番』だなんてまだ信じられませんが、どうか末永くよろしくお願いたします」

「君は紛れもなく僕の運命の伴侶だ。こうして出会えたことを神に感謝しよう」
番を見いだすことができない王族と、その「かりそめの番」。これから自分たちは、こんなふう



に周囲の人々を騙^{まか}していかなければならないのだ。

「フィリーネ……」

キルシュ侯爵夫妻がおずおずと近づいてくる。それに気づいたフィリーネは、ジェスライールの手を放して両親に向き直った。

「お父様、お母様、行ってきます」

フィリーネが微笑むと、両親は悲痛な顔をした。

「気をつけてね。私たちのことは気にしないでいいから」

「そうだぞ。領地や領民も大事だけれど、フィリーネ以上に大切なものなんかないんだからな」

「お父様、お母様……」

フィリーネの目に涙が浮かぶ。自分で決めたこととはいえ、二人の傍^{そば}を離れるのはとても辛かった。

「心配なさらなくてください。キルシュ侯爵、それに侯爵夫人」

その声と共に、不意に肩に手を置かれた。フィリーネは驚く間もなく、ジェスライールの胸に抱き寄せられる。その瞬間、馴染^{なじ}みのある匂いがふわりと鼻を通り抜けた。

——水の匂い？

フィリーネは不思議に思ったが、次のジェスライールの言葉に気を取られ、匂いのことはすぐに忘れてしまう。

「彼女は僕が必ず守ります。……どんなことから」

その声は低く、真摯な響きを帯びていた。だが、言葉の本当の意味に気づいた人間はどれほどいるだろうか。

キルシュ侯爵夫妻はもちろん気づいていた。そしてフィリーネも。

「どうか、くれぐれも娘を頼みます、ジェスライール殿下」

深々と頭を下げるキルシュ侯爵夫妻。ジェスライールはフィリーネを胸に抱いたまま力強く頷いた。

「行つてらっしゃい、お嬢様！」

「お元気で！ 殿下、お嬢様をお頼み申し上げます！」

駆けつけた領民たちが見守る中、フィリーネはジェスライールに手を引かれて馬車へ向かう。

途中で何度も足を止め、集まった領民や両親たちを、そして見違えるように立派になった屋敷を振り返った。ジェスライールは嫌な顔一つせず、そんなフィリーネに付き合う。

覚悟はしていたけれど、生まれてからずっと傍にあつた全てのものと別れるのは、思いのほか寂しくて辛かった。できれば今すぐこの場で前言を撤回し、あの屋敷に逃げ帰りたい。

でも、それはできないと分かっていた。あんなにフィリーネの結婚を喜んでくれる領民たちを前に、どうしてそんなことができようか。

今の自分にできるのは、彼らに不安を悟られないよう笑顔で別れることだけだ。

涙を堪えて必死に笑顔を作るフィリーネ。そんな彼女をジェスライールは真剣な顔で見下ろした。

「フィリーネ。君の人生を狂わせてしまつてすまない。……でも、ご両親の前で言ったことは嘘

出ず。

じゃない。我らが始祖、竜王グリーグバルトの名において、君を守るよ。命に代えても」

「ジェスライール殿下……」

その言葉は不安と悲しみに押しつぶされそうなフィリーネの心に温かく響いた。

——この方となら、きつと上手くやつていける。

「はい。よろしくお願ひします」

フィリーネはゆつくりと頷き、本物の笑みを浮かべた。

人々が見守る中、フィリーネとジェスライールを乗せた馬車が、王都へ向けてゆつくりと動き出す。

同じ頃、「沈黙の森」の中心にある小さな湖が、金色の淡い光を発していた。周囲では風もないのに木々の枝がざわめいている。

だがしばらくすると光は消え、森は何事もなかったかのように元の静寂を取り戻した。

「大丈夫？」

「だ、大丈夫、です……」

心配そうなジェスライールに、フィリーネは笑ってみせた。だが胃の中のものが逆流しそうなものを感じて顔を伏せ、新鮮な空気を吸っては吐く。

そうしている間も馬車はゴトゴトと揺れ続けた。

「水は飲めそう？」

「はい。それ、くらいは……」

彼に手伝わってもらって水を飲んだあと、フィリーネは力なく目を閉じる。今は水くらいしか飲むことができない。それ以外を口にしたとたん吐く自信があった。

この体調不良の原因は乗り物酔いだ。住み慣れた家を離れて三十分もしないうちに気持ち悪くなり、それがずっと続いている。

水分しか取れないフィリーネのために、ジェスライールは手ずからコップを口に運んでくれた。さらには馬に休憩を取らせるたびにフィリーネを抱き上げ、外の空気を吸わせてくれる。

——王太子殿下に世話をさせるなんて……

フィリーネがぐったりしているのは具合が悪いただけでなく、自分の失態にとことん落ち込んでいたからだった。

——馬車の振動で酔うとは、なんて情けないのかしら。

普段は馬車の振動などで酔いはしない。春や秋には自ら荷馬車を操って森に出かけているのだ。

ただし、フィリーネが慣れているのは、自分で手綱を引いて運転することだけ。人が運転する馬車に乗るのは慣れていないので、いつもと違う状況に身体がついていかなかったらしい。

——ああ、最初からこんな失敗をやらかすなんて……

ただただ申し訳なかった。主にジェスライールに対して。

そのジェスライールは、路肩に停めた馬車の外で兵士の一人と話している。

「このままモンテス伯爵領まで行って、今夜はそこで泊まる予定でしたが……いかがしますか？」

「これ以上進むと彼女の身体に障る。ジスト、すまないが一足先に街へ行って、宿を取っておいてくれ」

「御意」

その会話を聞いてフィリーネはさらに落ち込んだ。自分のせいで行程が大幅に遅れ、もともと宿泊予定だった場所までは行けないと判断されたらしい。

馬車に戻ってきたジェスライールに、フィリーネは頭を下げる。

「申し訳ありません、殿下。私のせいで……」

「いいんだ。君が僕らのためにしてくれることに比べたら、たいしたことはない。それより、あと

少し我慢してくれ。宿屋に着けば横になれるからね」

「……はい」

ジェスライールの気遣いに目を潤ませながら、フィリーネは頷いた。

* * *

それから一時間後、まだ明るいうちに馬車は街の高級宿屋に到着した。

ジェスライールはぐったりしているフィリーネを抱き上げ、馬車から運び出す。王家の紋章の入った馬車を興味深げに見ていた人々は、ジェスライールとフィリーネの登場にじよめいた。

王子の姿は広く知られている。その彼が大事そうに抱きかかえているのは「番」に違いないと分かったのだろう。驚きの声や歓声があがる中、ジェスライールは気にすることなく堂々と宿に入った。

この宿には大通りに面した正面口とは別に、人目につくことなく出入りできる裏口もある。けれど、ジェスライールたちはあえて目立つ正面に馬車を止めた。人々に王太子が「番」を見つけたのだと示し、噂を広めるためだった。

フィリーネを迎えるにあたって派手な馬車を用意したのもそのためだ。王都までの道中、人々はめったに見ることができない王家の馬車と、王太子と一緒に乗っている女性に興味を抱くことだろう。連れてきた兵士たちには、民から尋ねられたら王太子の「番」だと答えるように命じてある。

王太子がついに「番」を見つけたという噂は、瞬く間に広まっていくだろう。

もしグローヴ国がジェスライールの呪いのことを持ち出しても、もはや誰も信じようとしれない。

現に「番」は王太子の腕の中にいるのだから。

宿の中に入ると、部下のジストが近づいてきた。

「殿下、フィリーネ様の世話をする女性をよこすよう宿に頼んだのですが、少し遅れるそうです。今日は祭りがあつて人手が足りていないとのことだ」

「どうりで人が多いと思つたら、祭りがあるのか。そういえば今日だったな、『勝利の日』は」

二十六年前の今日、当時王太子だった国王ジークフリードが、グローヴ国の船団を打ち破った。それを讃えてこの日に祭りが行われるようになったのだ。

人々はまだ明るいうちから竜王を祭る廟へと赴き、花と祈りをささげる。大きな街には近隣の村からも人が集まり、まさにお祭り騒ぎになるのだという。

庶民にはなかなか泊まることのできない高級宿屋も、今日に限ってはほぼ満室になっている。そのため、忙しくて人手が足りないらしい。

「では、それまでフィリーネの世話は僕がする。世話人が来たらすぐ部屋に通してくれ」

ジェスライールは腕の中でぐったりしているフィリーネを見下ろした。血の気を失った顔は見えて痛々しく、今は一刻も早くベッドに寝かせてあげたい。

あとのことをジストに頼むと、ジェスライールは用意された部屋へ向かった。

この宿で一番値の張る部屋というだけあつて、中はとても広く、調度品も壁紙も質のいいものが

使われている。けれど生まれた時から最高級品に囲まれているジェスライルは、まるで気にすることなく、大きなベッドにフィリーネを横たえた。

「……ん……」

フィリーネが薄目を開ける。まだ意識が朦朧もうちろうとしているようで、琥珀色こはくいろの目は焦点が合っていない。その青白い頬にジェスライルはそっと手を当てる。

「フィリーネ、宿についたよ。手足を伸ばしてゆっくり休むといい」

「水……の、匂い……」

「水？ 水が飲みたいんだね？」

ジェスライルはベッド脇に用意されていた水差しを手に取り、水をコップにつぐ。それをフィリーネの口元へ運んだ。ところが、その水を飲もうとしたフィリーネは、力尽きたように枕に頭を戻してしまふ。

ジェスライルはフィリーネを抱き起こすと、今度はコップの水を自分の口元へ運ぶ。そして新鮮な水を口に含み、躊躇ためらうことなくフィリーネの唇を覆おほった。

「……んっ……」

桜色の唇を割って水を飲ませる。その時、流し込む水に「力」を注いだ。フィリーネの喉がこくと鳴り、ジェスライルが口移しで飲ませた水が下りていく。その水が体内で循環し、フィリーネの青白い頬には徐々に血色が戻ってきた。

長いまつげを震わせ、フィリーネが目を開ける。けれど、その琥珀色の瞳はまだぼんやりとしていた。

「もつと……」

濡れた唇から掠れた声が漏れる。意識がはつきりしていなくても、水のおかげで気分がよくなっていると分かったのだろう。

「もつと、水……欲し……」

ジェスライルは再びコップを手にとると、水を口に含んだ。

「ん……」

フィリーネは唇を開き、口移しで与えられる水を夢中で飲み干していく。シュミーズドレスを押し上げる胸の膨らみが、そのたびに上下に揺れた。

一方、ジェスライルは思いもよらない事態に直面していた。フィリーネの唇の柔らかさに煽られ、ただ水を飲ませるだけだったはずが、いつしかその唇を奪うように貪むさぼっていたのだ。

「んう……」

口付けがさらに激しくなりかけたその時、フィリーネが苦しそうなうめき声をあげた。ジェスライルはハッと、慌てて顔を上げる。

「はあ……」

ようやく解放されたフィリーネは大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出した。その頬は健康そうな血色を取り戻している。

「……ふあ……」

濡れた唇が満足そうな弧を描く。その口から水が一筋零れて、喉の方まで伝わっているのを見た

とたん、ジェスライルは思わず動いていた。

フィリーネの口元に顔を寄せ、零れた水を舌と唇で拭っていく。ただの水なのに、彼女の肌に伝わる雫はまるで甘露のようだった。舌に触れる肌も甘く、ジェスライルの頭を痺れさせる。顎から喉へと唇を滑らせながら、夢中で吸い上げた。

「んっ……」

フィリーネがくすぐったそうに身じろぎする。ジェスライルはそれに構わず甘い肌を味わい、とうとうシュミーズドレスの胸元までたどり着いた。

本能に支配されたまま、ドレスの襟に手を伸ばそうとした時、扉をノックする音がした。その音がジェスライルを正気に戻す。

「殿下。フィリーネ様の世話をする女性が到着しました」

ジストの声を聞いたジェスライルは、慌ててフィリーネから手を離す。そして彼女をベッドに横たえると、扉の方へ声をかけた。

「そうか。通してやってくれ」

「はい」

扉が開き、中年の女性が入ってくる。その手にあるのはフィリーネのために用意された着替えだった。

彼女にフィリーネの世話を託して、ジェスライルは部屋を出る。そのまま扉に背中を預け、手で顔を覆った。

「まいったな……」

「殿下？」

廊下で待機していたジストが不思議そうにジェスライルを見つめる。それを尻目に、ジェスライルは深いため息をついた。

魔女の呪いの影響か、ジェスライルはめったに女性に欲情しない。なのに、激しい飢えを感じてフィリーネの唇を貪ってしまった。意識が朦朧としていて無防備な女性にすべきことではない。もしノックの音で中断されなかったら、一体どうなっていたのだろう。

——彼女は僕の「番」ではない。ややこしい関係になるつもりなどないのに。

「本当にまいった……」

そう呟くジェスライルの口の中には、フィリーネの肌の甘さがいつまでも残っていた。

* * *

——まだ、ぐらぐらする……

キルシュ侯爵領を出発してから三日目の夜、フィリーネはようやく王宮にたどり着き、豪華なベッドでぐったりと横になっていた。

結局、王宮に到着するまでずっと乗り物酔いに悩まされ続けたのだ。

——なんたる失態……もう死にたい。

本当だったら、馬車が王宮に着くのは昼間の予定だった。ところが、フィリーネの体調を慮^{おもはか}つて休憩も多く取ったため、半日ほど遅くなってしまったのだ。そのせいで、予定されていた国王への謁見^{えつけん}も明日に延期された。

「大丈夫かい？」

しばらく席を外していたジェスライルが、いつの間にか部屋に戻ってきていた。ベッドで丸くなっているフィリーネの額に、大きくて少し冷たい手が触れる。その時、ふわっと水の匂いがした。――ま、まただわ。また水の匂いが……

馬車の中でも、ジェスライルからは時々こんなふうにも水の匂いがした。

毎朝、井戸に水を汲みにいくフィリーネにとっては、とても馴染^{なじ}みのある匂いだ。そのせいか、具合が悪くても不快に思ったことはない。それどころか、その匂いを嗅^かいだ時だけは気分の悪さが薄らぐのだった。

「水……」

フィリーネが思わず呟くと、ジェスライルは水が飲みたいのだと勘違いしたようで、ベッド脇の小さなテーブルに置いてある水差しを手を取った。

「あ、違^{ちが}うんです」

慌ててフィリーネは首を横に振った。

「水が欲しいのではなくて、その、気のせいかもしれないんですが、殿下から時々水の匂いが……」
「水の匂い？」

ジェスライルは驚いたように目を見開き、それから納得したように頷いた。

「ああ、なるほどね。君は匂いとして感じるわけか」

「殿下？」

フィリーネが怪訝^{けげん}な顔で首を傾げると、ジェスライルは楽しげに笑った。

「それは気のせいじゃないと思う。詳しいことは明日まとめて説明するよ。今日はもう遅いし、君も体調がまだ万全ではないからね」

「は、はい……」

「お休み、フィリーネ」

ジェスライルの手が頬に触れると、水の匂いが濃くなった。

その匂いに包まれながら、フィリーネは意識がずっと遠くなるのを感じた。

次の日の朝、フィリーネはすっきりとした気分を目を覚ました。体調不良の原因が乗り物酔いだったため、馬車を離れてしまえばあつという間に回復するのだろう。

「改めまして、フィリーネ様。私はフィリーネ様付きの侍女になったリルカと申します」

紺色の侍女服を身につけた女性が、深々と頭を下げる。美人というより可愛らしい容姿をしたその女性には見覚えがあった。

昨夜、ジェスライルに抱きかかえられるようにして部屋に運ばれたあと、彼の指示に従ってフィリーネの着替えを手伝ってくれた女性だ。フィリーネと同じくらいの歳だと思っていたが、実際